第 2 回山口大学総合技術部研修会

山田 知沙，藤井 直子，水久保 祥子，奈古屋 明，近藤 圭，渡邉 政典

技術企画課

1　はじめに

令和 4 年 11 月 24 日，第 2 回山口大学総合技術部研修会を実施した．第 1 回総合技術部研修会より「コミュニケーション能力の向上」フィードバックを得て，令和 4 年度から 6 年度にかけて「総合技術部としての組織力の向上とコミュニケーション能力の向上」を目標として設定し，年度ごとにその目的と達成目標を掲げて以下のとおり令和 4 年度の研修会を実施したので報告する．

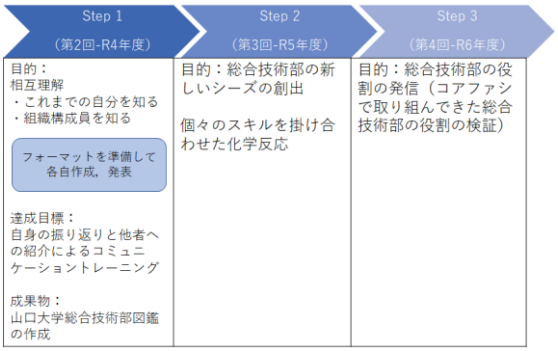

図 1. 研修会 3 年計画

2　スケジュールと内容

○スケジュール

日時　令和 4 年 11 月 24 日（木）13:00～16:00

13:00～13:10　開講式

13:10～14:40　発表 1（生命科学課・製作技術課）

14:40～14:50　休憩

14:50～16:20　発表 2（分析技術課・情報技術課・技術企画課）

16:20～16:30　閉講式

○内容

発表 「技術職員の相互知を目指して」

発表時間　ひとり 3 分（質疑応答時間を設けない）

内容　本研修会において自身の技術や業務についてスライド 1 枚にまとめ，発表・質疑応答を行う．これにより自身の振り返りを行うと共に，他者へ業務紹介を行い，「伝える」「聴く」「知る」等を中心としたコミュニケーション能力の向上を目指す．発表用テンプレートに沿って作成し，各自業務や今後の展望について発表する．

図 2. 発表テンプレート

○参加形式

対面とオンラインのハイブリッド形式

○参加対象者

総合技術部職員とし，原則全員対面参加とする．対面参加が不可能な場合は，オンライン参加を認める．業務等やむを得ない事情により欠席の場合は，テンプレートに沿って，研修会開催前までに PPT1 枚に録画・録音機能を使って動画を作成していただき，オンデマンド公開とした．

3　企画・運営及び発表

図 3. ハイブリッド開催発表の様子

第2章で述べたように，第2回山口大学総合技術部研修会（令和 4 年度実施）の研修目的は相互理解とした．本研修会において自身の技術や業務について A4 1 枚の PPT にまとめた．発表用スライドは，技術企画課で様式は統一したフォーマットを準備し，利用してもらった．研修会開催日の日程調整について各課で行い，やむを得ず，当日対面参加できない技術職員については，オンライン参加又はオンデマンド参加とした．本研修会は，本部長，総合技術部技術職員，リサーチファシリティマネジメントセンター事務室，学術研究部事務職員の 52 名参加があり，うち発表対象者として，課長を除く総合技術部技術職員全員及びリサーチファシリティマネジメントセンター事務室の事務職員合計 47 名による発表（対面 22 名，オンライン 9 名，オンデマンド 16 名）は発表した．発表については，技術職員としてのモチベーションと業務内容，今後やってみたいこと，仕事のワクワクポイントと業務上のキーワードを発表し，他者へ業務紹介を行い，「伝える」「聴く」「知る」等を中心としたコミュニケーション能力の向上を通して「相互知」を目指せる内容とした．企画及び運営は，技術企画課が担当し，それぞれが，司会，PC 操作，録画，タイムキーパー，全体補助及びカメラ撮影を担当した．

4　振り返り

発表後にはアンケート調査を実施し，参加者の意識の変化を推察した．図 7.において，「めったにない」，「全くない」との回答に対する理由には，「理由が思いつかない」「どちらかと言えば，先の事より今抱えている仕事をどうこなすかを優先的に考える傾向にあり，仕事に関してはあまり変化を好まない性格のため」「やってみたいという考え方で業務に取り組んでいない」という意見があり，個人の業務に対する考え方に回答が大きく依存していると考えられる．図 8.においては，2 割の参加者が自分自身の業務について，「あまり知ることに繋がらなかった」「知ることに繋がらなかった」という回答であり，研修会のテーマであった「相互知」への課題はあるものの，メリットもあることがわかった．その中で，最もよく伺えるキーワードは「連携」であることが推察され，コメントをいくつか紹介する．

- 情報×医学系，農場×設計製作等で何か役に立つものを作ることができること
- 困っている事案に対して，対応できる人を紹介することができる
- 別分野の業務連携の可能性があるかもしれないと思った
- 前例のない問題に対して，連携が可能になる
- 相手の業務に関連した依頼や相談をするきっかけになる
- 新たな見方や考え方を知ることで刺激となり，工夫が生まれ，自分の業務を見直すことができる
- 連携により，相談や課題解決のヒントが得られるかもとの期待できる
- 他の技術職員と連携を取ることで，受けることのできる依頼の内容の幅が広がったり，より良い支援を行うことができたりする
- 業務の可能性を拡げることができたり，要望を聞いた時に技術職員とその技術を求める人を繋いだりできる
- 他の業務を知ることで，何か依頼する課や係が見えてきた
- 現状ではまだメリットにつながるようなことはないが，将来的にはメリットになりうることがあると思う
- 普段の関りが少ないため，業務上で聞きたいことなどがあったときに誰（どこ）に聞けばよいかが，明確に判断できる
- 誰に助言を求めるか判断しやすくなる

- 他の方が持つ知識や技術により，自分の従来の仕事に新しい視点を取り入れることができる可能性がある
- 分野以外の技術を知ることで，協力出来ることや，新しいアイディアが出てくると考えます
- 自分の業務に活用できる情報が得られるかもしれない
- 自身が持っている技術で対応が難しい案件に遭遇した場合など専門技術外の事でも相談できる職員がいるかどうかの判断ができる
- 知識・技術の融通や協力について考えるきっかけになるかもしれない

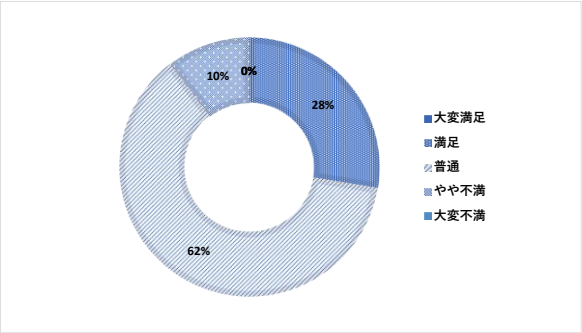

図 4. 研修会の満足度について

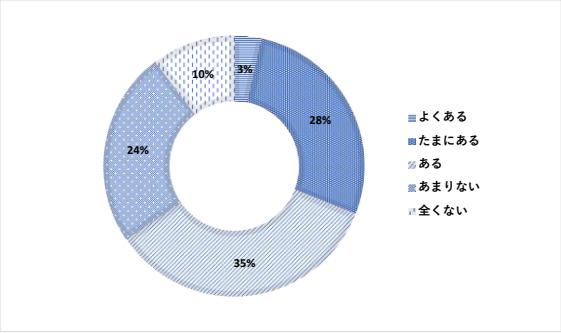

図 5. 普段，自身の業務に対するモチベーションを考えたことがありますか

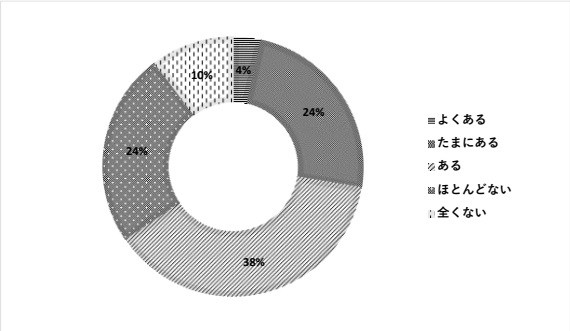

図 6. 普段から自身の業務を振り返り，他の技術職員の業務について理解を深めようとしていますか

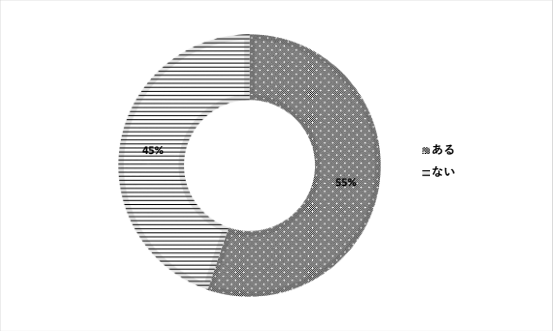

図 7. これまで自分の業務を振り返り，同分野以外の方に説明したことはありますか

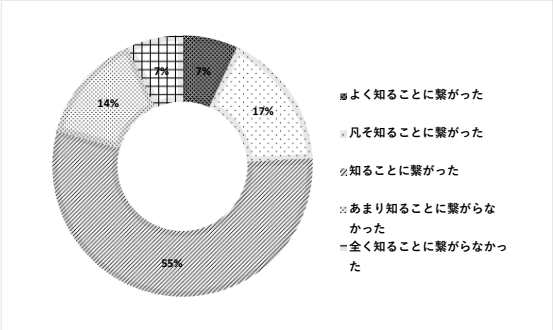

図 8. この研修をとおして、自分以外の技術職員の業務について知ることができましたか

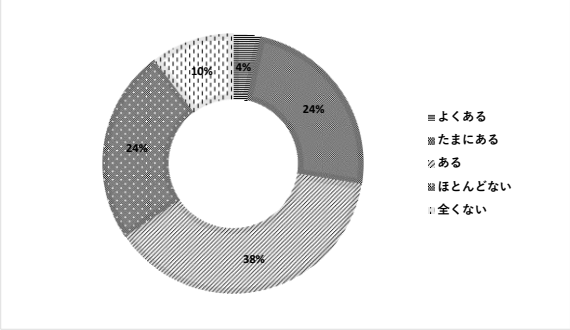

図 9. 本研修会は、総合技術部内の意識の共有が促進されたと思いますか

5　まとめ　次年度へ向けて～総合技術部の新しいシーズの創出～

次年度の研修は，今年度の研修を踏まえて，総合技術部の新しいシーズを創出することを達成目標に掲げている．そのため，研修会を通して，「相互知」をテーマとした今年度の研修会を通して，今後の総合技術部の展開について考えたことを，自分の業務から組織全体に関わることまで，幅広く意見を収集した．ここでも「連携」や「異分野融合」「意識改革」やこれらの類義語がキーワードとして挙げられた．大変貴重な意見が多く，以下に列記する．

- 分野及び部局等の垣根をこえた共同開発・取組みプロジェクトがなければ，施設や今までの仕事以上の更なる展開を見せることは難しい．またそれには周りの協力と業務実績として評価されることが必要と考えられる．
- 総合技術部が今後どのように展開していけるかは分からない．ただ，国の方針である科学技術・イノベーション基本計画や大学の中期目標，山口大学の先生方が実施している教育研究内容などから，必要となるニーズを把握し，新しいシーズに結び付ける必要はあるかと思う．自分の業務に関連することでいえば，自分の近い分野を中心に知識や技術や取り扱える機器などを増やして，技術コンサルティングができることが理想かと思う．
- 連携できることを検討し，大学全体に寄与できることを模索するのがよいのではないか．
- 業務を必要に応じて分業し，複数課で対応することができると良い．その際，分業の範囲決定と指示出しが非常に難しいため，誰がどのように決定するのか，まずはその流れから決める必要があると思う．
- 個人，グループで，知識やできることを増やしていくことで組織として展開していけるとよい．
- 他の部署（分野）にやってほしい，その分野について知りたい等は多少なりともあると思うので，できるだけその意見を出してもらい，受けた部署もできるだけそれに応じてもらうようにすればよいのではないか．
- 個々のレベルアップが結果的（間接的）に技術部全体のレベルアップにつながると思う．但し，個人のためにだけ自分勝手に（自分に都合の良いように）努力しただけでは総合技術部の発展は見込めないので，今後技術部が向かおうとするその方向性を明記（共有）して技術職員全員の足並み（ベクトル）をそろえる努力と意識改革は必要不可欠だと感じている．
- 自分以外の業務を知るためには，まず自身の業務への振り返りが必要となり，新たなチャレンジや最新情報のアピールが必要になると思っている．山口大学技術職員としての学外・他分野へのアピールにもつながり，業務の見える化が促進されると思う．
- 異分野融合が進むと良い．
- 技術職員同士で気軽に連携がとれる組織になってほしい．
- 特定の分野に縛られない，これまで受けることのできなかった類の支援依頼を行えるようになれるかもしれないという意識をもち，総合技術部として支援できることの幅を広げていくことも大事なことの一つだと思う．
- 自分自身の業務を振り返ることで，自分の技術を再認識し，他を知ることで視野を広げ，個人を超えて個人×個人，グループ×グループ，課×課として協働し，新しい価値や役割生み，組織の可能性を拓くことができる．
- 課やグループを横断した取り組みに資する情報になると思うので，対応できる業務の幅が広がると考えられる．
- マネジメントトラックに進む場合，各課の取り組み情報を知る機会になり，組織力も上がると思う．
- 技術協力をしてさらに新しい技術を提供できるようにする．
- 総合技術部の業務範囲が多岐に渡っていることがわかったので，今後はまだ総合技術部が展開していない分野への進出が見込めるのではないかと思った．
- これまでは横のつながりが希薄であるように感じていたので，相互の業務内容を理解していれば，課間・グループ間などでの業務連携が期待できる．
- 自分では解決できない課題について，総合技術部の技術を提供してもらうことで解決できれば良いと思う．
- 自分以外の技術職員の業務を知ることを通して，さまざまな職員と情報交換が増す可能性が高くなる．それに

よって，自分の専門を生かせるかもしれない事案を自らみつけることができる確率が高くなり，新しいシーズを創出することに寄与できると考える．

- 人同士，または課同士が連携することで，今までなかったアイディアが生まれたり，今までできなかったサービスを提供することができたりすると思う．
- 自分にはないプログラムや機器作成の技術をもった技術職員と連携することで，日常管理や研究に貢献できる．
- 縦の繋がりから横の繋がりへと広がり情報を共有することで，他分野と協同して新しい事業を行うことができるようになれるのではないかと思う．
- 自分は専門外の部分で疑問や相談を投げかけることができるようになると考えるので，相談窓口のようなシステムを作り活用していければ良いように思う．
- シーズ創出の前に，総合技術部として，山口大学の職員として，組織で働く社会人として，仕事に対する姿勢について考えることが必要なのではと感じた．

今年度のテーマの「相互知」を意識することにより，新しいシーズの創出を考える機会となったと同時に，そのための意識改革が課題として挙げられていることがよくわかった．来年度の研修会のテーマである「新しいシーズの創出」を達成目標とした研修会の企画・運営に役立てたい．